

窓辺

高校時代の恩師

みやち よしき
宮地 良樹

昨年、高校時代の恩師が亡くなりました。たまたま私が奉職していた病院に入院されていたので、病室までお見舞いに行きました。いきなり訪室したので、先生は五十数年ぶりに教え子が突然見舞いに来て驚かれたことでしょう。ベッドサイドの丸椅子に座って話しているうちにだんだん思い出してくださり、ひとしきり昔話に花が咲きました。

あるのだ」と教えてくれたのは、私の研修医時代のボスでした。「1日3回、ベッドサイドへ行つて話をしてください」とも言われましたが、「そんなに話すことがない」と言うと、「とにかく座っていれば患者さんがしびれをきらして、何か話しかけてくれるものだ」と諭されました。

私が16歳の高校1年生のとき、先生はまだ29歳の熱血教師でした。今となっては年齢の差をあまり感じなくなりましたが、運動部の顧問で文武両道を唱道する先生にとつて、私のようなガリ勉タイプの学生はお好みではなかったと思っていました。ところが亡くなってしばらくしてから、思いがけなく恩師の奥様から一通の封書が届きました。同封されていたのは、遺品の中から出てきたという、浪人時代に私が先生に送った暑中見舞いのはがきのカラーコピーでした。

先生がそのはがきを50年間も保存してくださっていたことを知り、目頭が熱くなるとともに、最後に病室で握った先生の手のぬくもりが卒然とよみがえりました。

静岡社会健康医学
大学院 大学長